こんにちはコミュニティ

Community

CONTENTS

02　コミュニティカレッジ 2023
06　まちあるき研修会
08　地域研修会
09　書籍紹介
10　いきいきコミュニティライフ！
11　コロナ禍後のコミュニティのもうひと頑張りを
12　お知らせ

栃木県誕生150年
みんなで創る、未来のとちぎ

Vol.
123
March
2024

photo： 栃木県庁 15 階　展望ロビー

特集　コミュニティカレッジ２０２３

「協働の処方箋 ～那須烏山に学ぶ、つながりのつくり方～」

地域のコミュニティリーダーの養成を図るためのコミュニティカレッジ(委託先：一般社団法人とちぎ市民協働研究会)は、地元那須烏山市で活動するNPO法人クロスアクションと社会福祉法人那須烏山市社会福祉協議会(社協)の協力と支援を得て開催されました。

今年度は「協働の処方箋～那須烏山に学ぶ、つながりのつくり方」をテーマに１月13日(土)と２月10日(土)の２日間、全５回の日程で実施しました。今年は延べ111人の参加者がありました。

那須烏山市では青年層の地域づくり団体が活発に活動しており、同時に既存の中高年層の地域づくり・ボランティア団体の息の長い活動もみられます。

(一社)とちぎ市民協働研究会　廣瀬隆人氏

NPO法人　クロスアクション
代表理事　髙橋　誠一氏

那須烏山市のバランスの取れた多様な世代による地域づくりの実態を学ぶこととしました。これまでのシンポジウムやフォーラムとは異なる新しい形式での学び方が提案されました。

今回のカレッジではまず、受講者が那須烏山市内で活動するキーパーソンへのインタビュー(聴き取り調査)を通じて、活動の概要や地域づくりへの思いを聴き取り、その人物の魅力や活動の紹介をするレポートを作成しました。併せてクロスアクションと社協が中心となって、市内の地域づくり団体に対して、組織や活動の紹介をする活動紹介の原稿の依頼をしました。こうした聴き取り調査のレポートである人物編と募集した活動紹介を一冊として発行しました。これが「なすから地域づくり大福帳」です。

さらに、リーダーたちの取組の紹介や参加者同士のディスカッションから、市民や地域づくり団体の関係者が知識と知恵を共有し、交流を深める機会として、「なすから地域づくりフォーラム」を開催しました。

第１回　◆１月13日(土)
聴き取り調査の手法を学ぶ

初日のレクチャーで「地域づくりは、課題解決や主体形成と理解されることが多いが、実際には、『地域づくりは人のつながり、知人や友人を増やす活動である』と理解したほうが良いのではないか」と廣瀬氏から提案され、「人のつながりをつくっておけば高齢になって

聴き取り調査のデモンストレーション
那須烏山市社会福祉協議会　山村氏　　宇都宮大学　小宮氏

一人暮らしも安心して暮らしていける。困りごと(地域課題)があっても地元の人たちが団結して、解決できるようになる。災害時の助け合いや、避難所での生活も快適で元気にすごせる。悩みを言える友人が多ければ、困りごとを解決できる。助けられたり、助けたりという関係は心や気持ちも安定させること」を確認しました。

その上で聴き取り調査(インタビュー)の方法・マナー等について丁寧に詳しく学び、実際の聴き取り調査のやり取りを見ながらその手法を学びました。

第２回 ◆１月13日（土）
聴き取り調査にチャレンジ

1月13日の学習の流れ

クロスアクションに紹介していただいた地域づくりの担い手14名に対して、1～2名程度の受講者で聴き取り調査という形での研修を展開しました。

受講者にパソコンを持参していただき、聴き取りの内容をその場でまとめました。写真や文章の編集も併せて行いました。A4サイズ用紙1～2枚に編集し、当日中に編集した内容を話し手に確認してもらいました。

その後、『なすから地域づくり大福帳』として集約し、2月10日(土)の講座で配布しました。

各自グループに分れ、午前中の講義とデモンストレーションを参考に午後はゲストに聴き取り調査（インタビュー）を行いました。

インタビューでは、活動の目的やねらい、活動内容、活動をする理由、はじめたきっかけ、などを聴き取り、地域づくりのヒントを学びました。

聴き取り調査（インタビュー）の様子

第３回 ◆２月10日（土）
なすから地域づくりフォーラムの開催

2月10日の学習の流れ

「なすから地域づくりフォーラム」では、話し手と聴き手に分かれる形のシンポジウムではなく、発表者がラウンドテーブルの中のメンバーとして座っているという状態からスタートしました。

そこにクロスアクション代表の高橋氏、那須烏山市社協の山村氏、そしてとちぎ市民協働研究会の廣瀬氏が３人で地域づくりの雑談をするというしつらえになりました。その３人の雑談の中から

グループに分れて交流

例えば「○○さんという方がこんな活動をしていますよ、では実際にその人の話しを聴いてみましょう」といって、その人に発言してもらうのです。４名の方に話しを伺いました。

このような「雑談的フォーラム」という形式で進めました。そこではグループ内の学び合いの時間を確保することに重点を置きました。

従来のようなスライドで実践発表をするという形式ではなく、「なすから地域づくり大福帳」の中の地域づくりのキーパーソンや雑談の中に出てくる人々を指名し話していただく、という手法とグループ内の話し合いによって深化していくことにしました。

活動発表

第４回 ◆２月10日（土）
地域ガーデンパーティーで交流

昼食のガーデンパーティへ移動し、「協働のインキュベーション」をテーマに美味しい地元の料理を食べながら、市内の団体のメンバーと気軽に交流し、新たなつながりを作りました。

なすから地域づくり
大福帳

第５回 ◆２月10日（土）
コミュニティカレッジ ふりかえり会

受講者はふりかえり会で一連の学びをふりかえりました。参加者全員に今回のコミュニティカレッジに参加しての感想を述べていただきました。

コミュニティカレッジへの参加者、団体にどのような意識の変化があったのか。団体同士がどのようなつながりを作ることができたのか。協働のポイントをこれから、参加者の地域や団体で活かせていくことができるのか？

研修会場前でのガーデンパーティー

天気も良く地元の食材、地元の企業提供の食事をいただいた。

研修会場：株式会社アラヤ産業（アラヤ興野ビレッジ）

那須烏山市興野 840　旧興野小学校

●今回のフォーラムの特徴は、次のとおりです。

① 那須烏山市全体の地域づくり、つながりの作り方を地元の団体と協働してリアルに学ぶという方法が選択されたこと。

② 地域づくりのリーダーが先行的な事例を自ら作成したパワーポイントで発表するという従来の方法ではなく、実際のリーダーに個別に聴き取り調査をじっくりと行い、そのレポートを共有するという学び方が選択されたこと。

③ 同時にシンポジウムやパネルディスカッションといった従来型の研修方法を乗り越えて、雑談的フォーラムという「ラウンドテーブル」の手法を取り入れた学び方が提案されたこと。

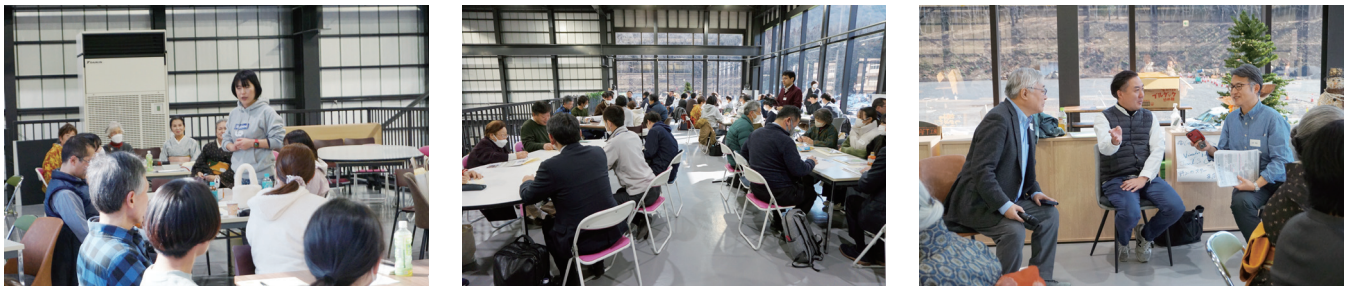
ふりかえりの様子

④初日のインタビューの成果や団体名鑑のような団体情報の公開をＤＸといわれる中で敢えて冊子というアナログな方法で共有されたこと。

⑤従来、個別に自由に取っていた「昼食」を交流の場として位置づけて積極的に研修プログラムに位置づけたこと、地元の食材を生かしたメニューを地元の高校生たちの会社がプロデュースしたこと。

⑥青年や若者、大学生の参加などが多く見られた中、中高年の女性グループが組織的に着物姿で参加し、多様に世代との協働と交流が実現できたこと。

ふりかえりの様子



コミュニティカレッジはこれからも新しいことに挑戦し、コミュニティ活動に少しでもお役に立てるよう、努めて参ります。皆様のご参加をおまちしております！

本誌は自然環境活動団体の情報支援を通じて、将来世代に美しい環境を引き継ぐ持続可能な社会の実現への寄与を目指して、県内すべての小・中学校、図書館等に配布しています。若干残部がございます、よろしければ以下にてお申し込みください。

1冊600円、2冊より1冊あたり500円（送料込）以上を目安にお振込みください。
郵便振替口座　00110－9－265575
NPO法人とちぎ協働デザインリーグ
通信欄に、住所・氏名・電話番号・冊数をご記入ください。恐縮ですが、振込手数料のご負担をお願い致します。

2023.12.7(木)
つなぎ方の秘訣を探る－

12月7日（木）に栃木市都賀町にある「つがの里（ふるさとセンター）」で「まちあるき研修会」を開催しました。

「まちあるき研修会」は、地域資源を活用してまちづくりを行っている県内の事例を、まちあるきをしながら参加者同士の交流や意見交換等を通じて学ぶものです。

まちづくりネットワーク「つが」のさまざまな取組の中から、今回は「つがの里」を核としたまちづくりの活動を紹介します。

つがの里の成り立ちについてのスライドを鑑賞。

ハス祭り二次元コード付きの看板

「つが」活動報告

旧都賀町の頃から「つがの里」を会場に桜祭りやハス祭りを実施してきました。

きっかけは市町村合併で旧役場の時代に比べて都賀支所の職員数が大幅に減少し、少子高齢化で今までと同じ方法では事業の継続が難しくなりました。

まる×3ごとつが祭り（健康福祉祭り、産業祭、収穫祭を一緒にした）がコロナで中止になりました。

都賀地域の30自治会と25団体、個人にアンケートを実施し、結果を可視化させ、団体継続の苦悩を共有しました。形を変えて続けるか、やめるかを検討し、続けることに決まりました。

地域会議、地区社会福祉協議会とまちづくり実働組織それぞれが何ができて、何ができないのかを具体的に考え、困っていることを把握し、できることを集め、連携して大きなものにしていくことが大切と石本氏は語ります。

桜やハス池はSNSで毎日の開花状況を発信し、沢山の人で賑わっている。

つがの里シンボル「つがの里桜」
樹齢約170年の山桜。

研修後、ふるさとセンター（藤糸うどんの店）「桔梗」で皆で昼食をいただきました。

まるつが祭り

令和５年度まちあるき研修会　in つがの里

－いろんな目線で気づいた地域の魅力の生かし方＆

［まちづくりネットワーク「つが」の概要］

栃木市の「まちづくり実働組織」であるまちづくりネットワーク「つが」では発足以来、都賀地域の活性化や問題解決のために活動しています。また、地域のシンボルとも言える「つがの里」でハスの花を生かしたフォトコンテストを行い、好評を博しています。

コロナ禍を契機に生まれた活動が、地域にどのような好影響を与えているのか石本氏へお話を伺いました。

●まちづくりネットワーク「つが」ができるまで

平成26年　新生　栃木市誕生

平成27年４月１日

栃木市地域づくり推進条例ができる

平成28年３月15日

まちづくり実働組織説明会

平成28年８月19日

第１回

都賀地域まちづくり実働組織説明準備会

平成29年３月14日

まちづくりネットワーク「つが」設立

つがの里を参加者で散策

まちづくりねっとワーク「つが」
会長　石本　俊光　氏

まちづくりネットワーク

今までの取組

・資金づくりの勉強会

イベントに参加し、軍資金をつくる等

・とちぎの伝統工芸品　座敷箒づくり：

地場産業活性化事業として、とちぎ市民活動推進センターくらら、栃木農業高校と協力し、箒の草づくりからつくる体験を実施（参加費５００円）

・つが人会議（地域について話し合う）

・人形劇公演

（花さかじいさん・さるかにばなしなど）

・まる×3ごとつが祭りの開催

・まちづくり　都賀の魅力再発見

都賀地域の特徴を生かした、子どもから大人まで楽しめる遊び

魅力ある場所のウォーキングなど

ハス祭りフォトコンテストでは口コミと二次元コードで周知し、沢山の応募があり、栃木市長賞もできました。

ハス祭りも桜まつりも花の開花状況をＳＮＳで情報公開することにより、観光バスや写真撮影に来る人も増えそうです。新しい試みにより年々、多くの人に訪れてもらえるようになり、また、キッチンカーなどの出店も増えそうです。

試行錯誤しながら、さまざまな事業を実施しています。

今回、研修会へ参加された皆様からは石本氏の活動への取組の情熱に感動しました。新しいつながりもできた等と感想をいただきました。

とちぎの伝統工芸
つが箒づくり

人形劇の公演

www.orangeribbon.jp
子ども虐待防止
オレンジリボン
運動

栃木県コミュニティ協会地域研修会
（生活学校フォーラム）

12月14日(木)に、とちぎボランティアNPOセンター ぽ・ぽ・らにおいて、栃木県コミュニティ協会 地域研修会（生活学校フォーラム）を開催しました。

この研修会は毎年、栃木県生活学校連絡協議会と共催で行われています。

今年は「子どもをとりまく現状について～こどもが笑顔になるためにコミュニティの支援は～」をテーマに講演を行いました。

今回は2名の講師の方をお招きしての研修会でした。

参加された皆様からは「参考になった。」「自分の近い所にこんな方がいるのか、気をつけて生活したい。」「どのように支援へつなげられるかをもっと知りたい。」等の感想をいただきました。

研修会の様子

「子どもをとりまく現状について
～子どもが笑顔になるためにコミュニティの支援は～」

講　師：三村　友宏氏　（こども政策課　児童家庭支援・虐待対策担当係長）

講　師：齋藤　久美子氏（ケアラープロジェクト夜明け　代表）

「ケアラープロジェクト夜明け」の代表で鹿沼市にてヤングケアラーの語り場を開催し、どんなときも安心安全なコミュニケーションを通して信頼関係を築くことをモットーにヤングケアラー啓発支援をされています。

◎こども政策課　三村　友宏氏

法律上の分類は身体的虐待・心理的虐待・性的虐待・ネグレクト（養育放棄・養育放棄）がある。近年、増加しているのは心理的虐待、夫婦間暴力（＝子どもの目の前でお互いを傷つけあう虐待（面前DV））である。虐待の件数は全国的にみてここ10年で倍増している。栃木県では高止まりの状況である。ケアラー対策としては、一人一人の状況・気持ち、立場に寄り添って支援をすることが重要であり、大人側から型にはめ込んで支援するのは適切ではない。児童虐待かも…と思ったら、各市役所・町役場の児童虐待相談窓口か児童相談所にすぐに電話を！児童相談所虐待対応ダイヤル「189」は児童相談所に通告・相談できる全国共通の電話番号。近くの児童相談所につながる。

三村氏

◎ケアラープロジェクト　代表　齋藤久美子氏

日本におけるヤングケアラーとは？法令上の定義はない。

一般社団法人日本ケアラー連盟で掲げている定義。

本来、大人が担うとされているようなケアを病気や障害・依存症、通訳等の必要がある家族に無償でケアをしている18歳未満の子どもを指す。係わることになったら…焦らない。ひとりでどうにかしようとしない。守秘義務を守りながら情報提供できる機関や人と連携する。本人から話しを打ち明けてもらえるよう、信頼関係を築く。可能な範囲で情報収集をしておくなど。

齋藤氏

もし、気になる子どもがいたら…自治体の窓口に相談してみる。ソーシャルワーカーに繋ぐ。ケア対象者の話相手になるなど。家族の状況を多面的に理解していくことで孤立防止を防ぐ。いつだれがヤングケアラーになってもおかしくない時代。誰もが、自己決定・自己実現ができる'大丈夫'な社会へ。

連載 いきいきコミュニティライフ！⑨

文 / 安藤 正知

「新しい自治会への試み ～異色の出会い～」

前回のコラムでは、世代を超えた自治会との関わりについて述べましたが、今回は、新しい自治会を目指すうえで重要な「異色の出会い」をテーマに取り上げます。

少し前になりますが、2月3日に「宇都宮市自治会シンポジウム みんなで参加！うつのみやスタイル！」が開催されました。このシンポジウムは、多様な住民が関わる自治会運営を実現しようと、実行委員会を立ち上げて企画運営したものです。

その特徴は大きく 2 つ、一つ目は、NPO、企業、女性、子どもや若い世代、外国籍住民など多様な主体と自治会との関わりを取り上げたこと、二つ目は、出席者の皆さんにも議論に参加してもらう機会をつくったことです。

高齢者主体の自治会になりがちですが、そこから脱却するために、従来あまり接点がなかった人たちとの「異色の出会い」を広げようと、リレートークやポスター発表を通して事例を紹介しました。

また、コンセプトスピーチでは、「多様な主体の参加というのは簡単ですが、具体的に誰に参加して欲しいのかを明確にすることが大切です」とのアドバイスもいただきました。

さらに、聞くだけで終わらず、事例を聞いて何を感じたか、そしてどこを変えてみたいと思ったか、を会場の参加者同士で話し合ってもらうために、「みんなでディスカッション」の時間を設けました。

当日は定員を上回る350名が参加して下さり、全員で意見交換というわけにはいきませんでしたが、ポスターを見ながら、円卓を囲みながら、そして終了後も会場に残って立ち話をしながら、それぞれの立場＝異色の出会いを通して、自治会について語っていただくことができたと思います。

もちろん事情は自治会によってさまざまです。大事なのは、新しさを求める必要があるのかも含めて、思いを言葉にすること、悩んでいるのは自分だけじゃないと気付いていただけること（だから愚痴やボヤキも歓迎！）です。こうした機会を定期的に開催できたらと強く感じました。

安藤正知（あんどう まさとも）
認定 NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房 理事長
秋田市出身。化学品会社に 16 年勤務後退職し、2003 年より宇都宮市民活動サポートセンター勤務、2005 年 NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房設立に関わり、2019 年理事長就任、市民主体のまちづくりを目指して調査研究、まちづくりの実践を行っている。2012 年 1 月宇都宮市が開設した宇都宮市まちづくりセンターの指定管理者としてその管理運営に携わる。

つっちー　おすすめ！

◆書籍紹介◆

『等話：平等な会話が、あなたの人生と社会を変える』

松田　道雄　出版社　新評論

「とうわ」と聞いて、本書のタイトルの漢字２文字を想起した方は、どれくらいいらっしゃるでしょうか…。というくらい、あまり馴染みのない言葉の「等話」ですが、文字通り「平等な会話」という著者による造語です。

本書が出版された２０２１年は、折しもコロナ禍真っ只中。「自粛」「不要不急」「黙食」「ステイホーム」「ソーシャルディスタンス」などの言葉が飛び交い、「他者と会わない」「必要以上にしゃべらない」ことが是とされていました。

著者は、「平等」という言葉に、「ともに生きている者同士は根源的に等しい」という意味合いを感じると指摘しています。グローバルな視点でとらえると、世界のあちこちで戦争や人種差別が起こり、国内に目を向けても貧困や孤立の問題が浮き彫りとなっており、誰もが平等だと思える社会を築くことはとても難しいのです。

そればかりか、社会的な不平等の状態をつくることに、私たちも知らず知らずのうちに加担しているのかもしれません。その克服策として、人が人を思いやり、人とともに生きることを実現しながら、自分の中での平等意識を育むことを強調しています。

一方、「会話」について、「情報共有」を広げるだけのコミュニケーションの力ではなく、相手を思いやり、「生きている幸せ」をお互いに生み出し合う「おしゃべり」の力、すなわちカンバセーションの力であると指摘しています。いわゆる「無駄話」には、見方を変えれば「生活の潤い」という側面があり、「自分の考え」と「相手の考え」を互いに交わしながら「自分の人生を生きる」プロセスは、日常に埋め込まれたかけがえのない応酬なのかもしれません。

土崎　雄祐（つちざき　ゆうすけ）秋田県生まれ。これまでに NPO 職員や大学教員として学生向け地域志向科目や市民向け講座のプログラム開発、自治体職員研修の企画立案支援などに従事。（一社）とちぎ市民協働研究会専務理事、認定 NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房常務理事。公職として、那須塩原市男女共同参画審議会会長など。

私たちもコミュニティづくりに協力しています

『できる親切はみんなでしよう　それが社会の習慣となるように』

「小さな親切」運動栃木県本部

代　表：黒本　淳之介
事務局：栃木銀行　経営企画部広報文化室
住　所：宇都宮市西２丁目１番１８号
ＴＥＬ：０２８－６３３－１２４１（代）

コロナ禍後のコミュニティのもう一頑張りを

栃木県コミュニティ協会研究推進委員長　三橋伸夫

3年にも及んだコロナ禍ですが、令和5年5月より新型コロナウイルスが感染法上の二類から五類へ移行し、これに伴ない社会生活上の緩和措置がとられました。その後、地域のコミュニティ活動は徐々に回復しているように思われますが、必ずしも実態は明らかではありません。

そこで栃木県コミュニティ協会では、コミュニティ活動の回復状況および現場の創意工夫や知恵などを把握し、結果を全県的に共有するため会員（団体）を対象にアンケートを実施いたしました。2年前に同じ趣旨で実施したアンケート結果との比較も視野に入れました。またその際、コミュニティ団体の情報化（デジタル化）の動きもとらえました。

結果をかいつまんで紹介いたします。コミュニティ活動全般について回答者の評価は「かなり戻っている」が回答総数の 46.8%（以下同様）、次いで「以前の状況に戻ってきている」が 36.2%で、あわせて8割を超えていますが、他方「以前の状況に遠く及ばない」と「多くの活動が休止のまま」は1割ほどありました。コミュニティが抱える問題・課題で、「役員が高齢化し後継者が不足している」（51.1%）と、「活動への参加者、協力者が集まらない」（27.7%）が多かったことと考えあわせますと、ある程度回復はしたものの課題は抱えたままという実態が見えてきました。自由記入欄で「コミュニティ組織の存在意義が明確でないため組織を退会する自治会が増えている」という回答があり、これに示されるように、コロナ禍の後遺症とでも呼べる状況の広がりがあるのではないかと思われます。コミュニティ団体の体力強化のみならず体質改善の提起と受け止められます。

コロナ禍後に新規に始めた事業で着目されるのが、詳細は省きますが「防火防災活動」および「盆踊り・お祭り」です。これらは「老人クラブ」「子ども会」などとともに2年前と比べて大きく取組み割合の増えた活動分野で、コミュニティの回復をめざす底力の発揮といえます。

情報化（デジタル化）では、団体の「マネジメント業務」で大きく進展していることが明らかになった一方、「会議・うちあわせ」や「イベント・行事」での進展はそれほどではありませんでした。一般論ですが、若い方がもっとコミュニティ活動に関わりをもたないと進まない側面があるようです。

総じて各コミュニティ団体は試行錯誤を重ねながら活動を再開しようと努めている現状をみることができました。最も危惧されるのは、活動の担い手の高齢化と活動への支援者、参加者の減少ということです。あらためて地域におけるコミュニティの意義を問い直し全般的な活動の見直しが必要な時期にさしかかっているのではないでしょうか。地域の高齢化と防災や福祉・介護、子育て・教育など課題が山積するなか、それぞれのコミュニティにおかれましてはつながりの回復に向け「もう一頑張り」をお願いしたいと思います。

お 知 ら せ

▼　令和６年度 総会・研修会　▼

日　時：令和６（2024）年５月 20 日（月）　13：30～16：20

会　場：栃木県総合文化センター　3F　特別会議室

【講 演】　演題：「　これからのコミュニティづくり　」

田畑　昇悟 氏（NPO 法人テダス　事務局長 ）

1985 年、兵庫県丹波市生まれ。学生起業でイベント会社を設立。その後、地域紙の記者を 6 年間。新聞社を退職後、ガーナで NGO 活動に参加。帰国後、2014 年に NPO 法人テダスに就職し、事務局長として NPO の支援活動に従事。主な業務は「市民活動のよろず相談員」。ほか、「集落会議支援」「NPO 向け教材の開発・販売」「集落の教科書の制作支援」などを担当。

■ 編 集 後 記 ■

○「こんにちはコミュニティ」123号、いかがでしたでしょうか。

○ 今年度の協会事業も、コミュニティ活動の担い手育成・確保を図るための講演会、研修会やコミュニティカレッジの開催や、コミュニティづくりの調査・研究、実践活動への助成や表彰など盛りだくさんで実施して参りましたが、県内で息づいているコミュニティ活動や県外の好事例を参考に、どう各々の地域で活かしていくことができるのかといった観点で各種事業を開催して参りました。

○ また、令和5年が栃木県誕生150年を迎える年ということで、本協会においても令和5年8月3日(木)にNPO法人おりがみ代表の都築則彦氏を講師にお迎えし、記念講演を開催いたしました。これら協会事業の企画等にエネルギッシュに関わってくださった皆様、講師をお務めいただいた方々、各種事業に積極的に御参加いただいたすべての会員の皆様には本当にお世話になり、改めて感謝申し上げます。

○ 少子高齢化が進む中、地域のコミュニティが更に活性化するために、どんな事業がよいのだろうと事務局もまだまだ模索が続きますが、今後とも好事例の収集・情報発信等に努めて参りたいと思っております。

皆様からの、御意見・御感想等をどしどしお寄せください。(Y)

栃木県コミュニティ協会のマスコットキャラクター「コミたん」をご存じですか？

栃木県のかたちをした、ひつじ。
“地域のみんなの心の糸を紡ぐ”という意味が込められています。

背中の “C”のマークは、当協会のシンボルマーク。“C”と“M”を図案化したもので、“C”はコミュニティやカントリーを表し、“M”は人々のつながりを表しています。
人々の心のつながりの大切さを表現しています。

表紙写真：
栃木県庁舎 15 階の回廊式の展望ロビーからの一枚。地上約 65m からのパノラマビューを望む場所として県民に親しまれている。晴れた日には富士山まで見ることができる。
令和 5 年 8 月 7 日に（一社）夜景観光コンベンションビューローが発表した第 18 回「日本夜景遺産」新規認定地に栃木県庁ロビーが認定された。15 階にはレストラン十五夜もあり、景色をたのしみながら食事ができる。

発　行：栃木県コミュニティ協会
〒320－8501
栃木県宇都宮市塙田 1-1-20
栃木県生活文化スポーツ部
県民協働推進課内
TEL 028-623-2110／FAX 028-623-2121